教育研究業績書

2024年10月22日

研究内容のキーワード

研究分野

応用言語学、在外ベトナムノ	、研究,日2	本語教育学		É	自律学習,エスノグラフィー		
学位					最終学歴		
博士 (言語文化学)				J	大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻博士後		
				教育上の能力に	関する事項		
事	項			年月	日	概要	
1 教育方法の実践例							
2 作成した教科書、教材							
1.日本語学習アドバイジ	ングをやっ゛	てみよう(ウ:	ェブ	2020年10月10日	公開	学習者が自分の言語学習の目標や方法を自分で決め、 学習計画を自分で立てる能力である「学習者オートノ ミー(自律性)」を育む方法として提唱されている 「言語学習アドバイジング」を日本でも浸透させるた めに、日本語のウェブサイトを制作した。理論的な背景や、参考文献を紹介し、各制作者がそれぞれの実践をふまえた考えを示すことで読者が現場での応用方法を考えるためのヒントとなることを目的としている。ウェブサイトの構想段階からメンバーの一人であり、言語学習アドバイジングを行う意義について執筆した。 制作者:瀬井陽子、瀬尾悠希子、中井好男、中尾未来/周正、林貴哉、脇坂真彩子	
3 実務の経験を有する者につ	いての特詞	記事項				17 7 3 3 1 1 2 2 7 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	
4 その他							
				職務上の実績に	関する事項		
事	項			年月	目	概要	
1 資格、免許							
2 特許等				<u> </u>			
3 実務の経験を有する者にて	ついての特語	尼事項		I		T	
 4 その他							
4 ての他							
,							
	››∨ - ₽ተ፡	7 % (□ ¬) .).	3/4/-	研究業績等に			
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発表の年月		示所、発表雑誌等 は学会等の名称		概要	
1 著書	11.	000450	1 17	A HILLAGE 1	Two is		
1. 一歩進んだ日本語教 育概論:実践と研究 のダイアローグ	共	31日		大学出版会	義永美央子 担当:第10 の中に日本	章「在日外国人の人生・生活に注目した実践―日常生活 語教室を作る」(林貴哉)	
2. 外国人生徒と共に歩む大阪の高校:学校文化の変容と卒業生のライフコース	共	2023年6月1日	明石	書店	章「枠校と に注目して	管「新しく「枠校」をつくる」(林貴哉・榎井縁)、第9 大学進学・就職:枠校卒業生の母語とアイデンティティ 」(林貴哉・王一瓊)、第13章「トランスランゲージン くる:外国人生徒が力を発揮するために」(王一瓊・林	
3. リフレクティブ・ダ イアローグ:学習者 オートノミーを育む 言語学習アドバイジ ング	共	2022年3月31日	大阪	大学出版会	に関する著 Learning (を日本語に 育において ことを企図 監訳:義永	律性を育むための言語学習アドバイジングの実践と研究作であるReflective Dialogue: Advising in Language Kato Satoko, Mynard Jo 著)を日本語に翻訳した。本書翻訳することを通して、英語教育だけでなく、日本語教も学習者オートノミーを育む実践に対して理解が深まるしている。 美央子,加藤聡子、麻矢、瀬井陽子、林貴哉、久次優子、村上智里	

研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要	
1 著書				担当:第2章「研究を実践に生かす一実践の中のアドバイジング」の中の「2.1.2 深化一ターニングポイントへの移行」(pp. 133-192)を構成する10の対話の翻訳と全体的な相互チェック。	
2 学位論文 1.ベトナム系移住者の モバイル・ライブズ とことば:難民とし ての経験と日本での 生活	単	2021年6月 30日	大阪大学大学院言 語文化研究科博士 学位申請論文	多文化共生の課題の一つである「言語(日本語)の問題」を当事者の視点から捉え直すために、難民として来日したベトナム系移住者を対象としたライフストーリー研究を実施した。日本語だけではなく、当事者のモバイル・ライブズ(移動の中にある生活)の中で、複数の言語を渾然一体と使用してきた経験に注目した。言語的な背景が異なる者同士のコミュニケーションの捉え方を示した。	
3 学術論文					
1.書評:佐藤慎司・神 吉宇一・奥野由紀 子・三輪聖編『こと ばの教育と平和一争 い・隔たり・不公正 を乗り越えるための 理論と実践』	単	2024年6月 15日	『早稲田日本語教育学』第36号、pp. 291-295		
2.2023年度日本語教育 関連活動の報告およ び「コロナ禍」前後 における教育実践の 検証	共	2024年4月5日	『武庫川国文』第 96号、pp. 47-62	著者:上田和子,野畑理佳,林貴哉	
3. 交換留学のための英 語学習支援: Project HELP! とタ ンデム学習プロジェ クトの比較から	共	2024年3月31日	『多文化社会と留 学生交流: 大阪大 学国際教育交流セ ンター研究論集』 第28号、pp. 65- 72	大阪大学国際教育交流センターでは、海外留学実現のために必要な 英語力の獲得を支援するために、2015年度から英語メンタリング学 習プログラム「Project HELP!」を実施してきた。本稿では、 HELP!と同様、得意な言語が異なる学生同士がペアとなって言語学 習を行うプログラムとして、2012年度から大阪大学文学研究科・文 学部で実施されてきた「タンデム学習プロジェクト」を比較対象と しながら、HELP!におけるコーディネーターの役割を検討した。	
4. 留学生との英語学習 プログラム "Project HELP!" の実践報告: 9年間 の取り組み事例とア ンケート結果の分析 を中心に	共	2024年3月31日	『多文化社会と留 学生交流: 大阪大 学国際教育交流セ ンター研究論 集』、第28号、 pp. 55-63	著者:林貴哉,中野遼子,垣塚保子本稿は、2015年度より大阪大学国際教育交流センター主催で開始した「留学生との英語学習プログラム "Project HELP!"」(以下、HELP!)について、その実践報告を行うとともに、参加者対象に実施したアンケート結果を分析して、HELP!の教育的効果を明らかにすることを目的としている。具体的には、HELP!の9年間のデータをまとめ、留学生(メンター)と英語学習者(メンティー)のマッチングのルールについて整理する。次に、これまでのアンケート結果を分析することで、メンターとメンティーにそれぞれどのような学びがあったのかを明らかにした。著者:中野遼子,林貴哉,垣塚保子	
5.Struggle with the "Japanese Healthcare System for Older Adults" : A Case of a Vietnamese Professional Care Worker (査読付)	共	2024年3月 28日	Bulletin of Asia -Pacific Studies, 26 (2), pp. 47-60	者者:中野原子,林貞成,坦塚保子著者:林貴哉,宮原曉,李宗泰(クリス)	
6.Transnational Caregiving for Older Adults and Wellness in North America, Latin America, and Asia	共	2024年3月 28日	Bulletin of Asia -Pacific Studies, 26 (2), pp. 1-3	著者:星野和実,林貴哉	
7.エスノグラファーは 「書くことが躊躇わ れること」をどう記 述し得るか:ある華	共	2023年3月	『言語文化研究』 大阪大学大学院人 文学研究科言語文 化専攻・外国学専	著者: 宮原曉,林貴哉,岡野翔太	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
僑の経歴に関するテ			攻・日本学専攻応	
クストをめぐって			用日本語コース、	
(査読付)			第49号、pp. 181-	
(E.m.14)			202	
8.マイナー文学として	共	2022年3月	『アジア太平洋論	 難民として日本に受け入れられた中国系ベトナム人が日本語で著し
の『ベトナム難民少	大	2022年3万		
			叢』大阪大学グ	た『ベトナム難民少女の十年』を分析対象とした。北京語、広東
女の十年』:漢語を			ローバルイニシア	語、海南語、ベトナム語、日本語を生活の中で複雑に関連させなが
拠りどころにローカ			ティブ機構、第24	ら使用してきた主人公はローカルな音声言語からの排除を経験す
ルな声を生きる(査			号、pp. 185-206	る。いずれの場所にも完全に受け入れられなかったが、複数言語を
読付)				媒介する漢語を拠り所としてローカルな声の中を生きていた。
				著者:林貴哉,宮原曉
				担当:宮原がマイナー文学の視点から書記言語と音声言語を区分す
				る記述戦略について検討し、林はその戦略に基づいてテクストを分
				析した。
9.日本の大学における	共	2020年6月	『JASAL Journal』	タンデム学習では、異なる母語を話す二人がペアになり、互いの言
タンデム学習の意義			日本自律学習学	 語や文化を学び合う。九州大学と大阪大学において、カリキュラム
(査読付)			会、第1巻第1号、	外活動として対面式タンデム学習を行った者を対象としたアンケー
(pp. 104-128	ト調査を実施した。その結果、多様な背景・ニーズを持った参加者
				にも対応できる、個人レベルでの継続的な交流を促すといった意義
				が明らかになった。
				著者:脇坂真彩子,林貴哉,北川夏子,ヴォランスキ、バルト
				シュ、原田佳祐、蔡真彦
				担当:大阪大学の事例 (pp. 116-120) とまとめ (pp. 121-123) を
				執筆した。
 10.外国人生徒を「特別	共	2019年3月	『未来共生学』大	大阪府立高校では、外国人生徒に必要な支援を行う「特別扱いする
扱いする学校文化」	7	15日	阪大学国際共創大	学校文化」が形成されている。その形成過程を明らかにするために
の形成に関する考察		131	学院 学位プログラ	外国人特別入試を実施する複数の特別枠校の教員を対象としたイン
: 大阪府立特別枠校			ム推進機構未来共	タビューを実施した。「特別扱いする学校文化」の形成に対して、
の事例から(査読			生イノベーター博	各特別枠校の社会的文脈が異なる影響を与えていることや、担当教
付)			士課程プログラム	員の形成に果たす役割について明らかにした。
19 /			部門、第6号、pp.	著者:伊藤莉央,王一瓊,林貴哉,山本晃輔
			299-327	141 : 普通科のG校の事例(pp. 316-320)。
 11.中学校から高校へ繋	単	2019年3月	『外国につながる	公立高校で学ぶ外国にルーツを持つ子どもたちが、中学校や国際交
がるサポート:大阪	平	2015年3月	子どもを元気にす	流センター、地域の支援教室、NPO 等において、どのような支援を
				一位でフター、地域の支援教主、NFO 寺において、このような支援を 一受けてきたのかを明らかにするために、高校生を対象にアンケート
府立特別枠校に通う 外国につながる高校			るための実態調査 報告書:大阪の日	受けてきたのがを明らかにするために、高校生を対象にナンケート 調査とインタビュー調査を行った。応募者は本論文において、イン
			18.6 6 7 100 - 11	7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7
生へのインタビュー			本語指導が必要な	タビュー調査を担当するメンバーの一人であり、中学校から高校へ
から(調査報告書)			帰国生徒・外国人	進学するためのサポートに焦点を当てた分析を行った。
			生徒入学者選抜実	
			施校の高校生への	
			アンケート・イン	
			タビューから見え	
			てきたこと』特定	
			非営利活動法人お	
			おさかこども多文	
			化センター, pp.	
10 - 21 1 2 1 4/2 2 1/2 2		0010	31-42	
12.ベトナム人集住地域	単	2018年12月	『言語文化教育研	日本語学習の機会が限られていたベトナム難民を対象に、ベトナム
における複数言語の			究』言語文化教育	語や日本語といった複数の言語を使用・学習することの意味づけを
使用と学習に関する			研究学会、第16	明らかにすることを目的とした。インタビュー調査とフィールド
研究:日本に定住し			巻、pp. 136-156	ワークの結果、職場での日本語の使用を阻む社会的文脈や、「話す
た中国系ベトナム難				権利」が保障された場所の重要性、さらに、ベトナム仏教の活動を
民のライフストー				行うという一見、ベトナム語に重点が置かれた活動であっても、日
リーから(査読付)				本社会への積極的な参与を支える要因になっていたことが明らかに
10 40 5 77 12 12		0010 -0 -	F. L. H. H. W.	なった。
13.自分の思いが伝わる	単	2018年3月	『未来共生学』大	多文化共生を実現させるための諸課題と、その解決のための取り組
場所:大阪市立市岡			阪大学未来戦略機	みの一事例として、外国から大阪市内の公立中学校に編入してきた
中学校日本語教室			構第五部門未来共	生徒に対して、日本語教育や適応指導を行っている公立中学校の日
			生イノベーター博	本語教室を取り上げた。そこでは、来日間もない生徒が自分の伝え

	研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要	
3 学術論文		I	1		
14.「海」を通した共生 の姿:言語、文化、 世代を超えた教室外 の学びの場	単	2017年3月	士課程プログラム、第5号、pp. 273-284 『未来共生学』大阪大学未来戦略機構第五部門未来共生学』大政大学未来戦略機構第五部門オーサーはである。 は、第4号、pp. 182 182 182 182 182 182 182 182 182 182	たいことを教員に伝えるために試みる多様な手段(母語やイラストの使用等)が許容され、一人ひとりの生徒の生活に寄り添ったサポートが行われていた。 学びの場は教育機関の中にのみあるのではない。ベトナム語の語学留学のために1年間を過ごしたベトナムの海辺の町で実施されていた、移動図書館の活動について述べた。それは言語、文化、世代を超えた多様な背景を持つ人々が、自分なりの方法で関わることのできる活動である。そこに関わる筆者自身の第二言語ユーザーとしての経験とアイデンティティの変容についても記している。	
Norton, Identity and Language Learning: Extending the Conversation (2nd edition)Bristol: Multilingual	単	2016年3月	430-432 『未来共生学』大 阪大学未来戦略機 構第五部門未来共 生イノベーター博 士課程プログラ ム、第3号、pp. 446-448	カナダ在住の移民女性のアイデンティティと言語学習について論じたNorton (2013) の書評を行った。多文化共生に向けた示唆として、言語学習者が、不平等な力関係を乗り越えて目標言語の話されている社会の中で安心して言語を使用できるようにするためには、学習者の背景や現在置かれている状況といったアイデンティティに関わる事柄を丁寧に理解しようとする研究や実践が必要になるという指摘を行った。	
Matters, 2013 16. 震災から4年を経た野田村の今:6人の眼を通して見えてきたもの	共	2016年3月	『未来共生学』大 阪大学未来戦略機 構第五部門未来共 生イノベーター博 士課程プログラ ム、第3号、pp. 376-383	2011年に発生した東日本大震災の被災地の一つである岩手県九戸郡野田村の復興状況を理解することを目的としたフィールドワークを実施した。野田村に生きる人々に聞き取りを行った上で、調査結果を地域へと還元させるためのコミュニティラジオ番組を制作し、地域に向けた発信を行った。著者:伊藤莉央,岩根あずさ,小泉朝未,林貴哉,陳文叡,山田真知子担当:公立図書館で読み聞かせ活動を行う女性たちにインタビューを行った(p. 378)。	
その他			1		
1. 学会ゲストスピーカー					
- ** • = +					
2. 学会発表	T	I	Ta	To	
1. Roles of Internet Radio Programmes in Vietnamese: Case of Community Centre in Kobe, Japan 2. ベトナムの国旗と口ゴ:在日ベトナム人支援団体の事例から(ポスター発表、ライトニングトーク)	単	2024年8月 16日 2023年12月 9日	21st AILA World Congress, International Association of Applied Linguistics 第105回東南アジア 学会研究大会	Symposium "Youth in translingual and transmissional practices in a rapidly aging society: The importance of 'space' and language." (Chair: Rika Yamashita)	
3. 宗教コミュニティに おけるコミュニケー ション:ベトナム人 集住地域に位置する カトリック教会に注 目して(パネル発 表)	単	2023年6月 18日	日本言語政策学会 第25回研究大会	パネル「エスニシティに基づいた空間はどのように形成されるのか 一日本のベトナム系およびパキスタン系「コミュニティ」の事例よ り一」(山下里香・安達真弓・林貴哉)の一部として発表。	
4. 在日ベトナム系移住 者の生活の中でのこ とばをめぐる経験 (口頭発表)	単	2021年9月5日	日本オーラル・ヒ ストリー学会第19 回大会	難民として来日したベトナム系移住者を対象に、当事者の視点からことばをめぐる経験を明らかにした。先行研究が指摘する日本語習得の不十分さは、暗黙裡に日本語母語話者が規範とされている等、ホスト社会からの視点にとどまっていた。本発表では、ベトナム人集住地域での参与観察やインタビューの結果をもとに、ベトナム系移住者の経験を分析することで、移住者の視点から複数言語を使用した生活を提示した。	
5.対面式タンデム学習	共	2019年12月	日本自律学習学会	大阪大学文学部の対面式タンデム学習プロジェクトでは、参加者が	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
における自律的な学 習とその変化(口頭 発表) 6. 外国人生徒の高校卒	.	2019年9月	2019年次大会 数育社会学会第71	顔合わせをし、学習目標や計画、初回の学習内容や方法を決めると ころまではコーディネーターが関与するが、その後の学習活動は参 加者に任される。インタビュー調査の結果から、タンデム学習の参 加者が、学習開始後にどのように自律的な学習を進めていくのか、 また、目標や学習方法の変更が必要な場合は、どのように変化させ ていくのかを明らかにした。 発表者:林貴哉、蔡真彦 外国人生徒向けの特別枠を設置している大阪府立高校7校のうち、す
業後の進路形成に関 する研究:大阪府立 特別枠校の卒業生イ ンタビューより(口 頭発表)		12日	回大会	でに卒業生を輩出している6校の卒業生40名にインタビュー調査を実施した。特別枠校では支援の充実した大学への進路指導が行われ、生徒のライフチャンスの最大化が図られていた。大学進学後も、特別枠校で培った母国を志向するエスニック・アイデンティティは維持され続けており、一部の生徒は、大学を卒業し、就職する過程において自らのエスニックな資源を最大化し、日本社会を支える人材となっていることが明らかになった。発表者:林貴哉,棚田洋平、伊藤莉央、王一瓊、櫻木晴日、植田泰史、今井貴代子、榎井縁、山本晃輔担当:6校におけるフィールド調査と、発表全体の総括。
7. 在外ベトナム人コ ミュニティにおける 声の発信: 米国のベ トナム語メディア関 係者の語りから(口 頭発表)	単	2019年9月8日	日本オーラル・ヒ ストリー学会第17 回大会	米国カリフォルニア州に位置する世界最大の在外ベトナム人コミュニティにおいて、ベトナム語のテレビ番組が制作される背景や過程を分析した。番組制作者への聞き取りから、南北統一前のベトナム南部で使用されていたベトナム語を使用することが、ベトナム人コミュニティの声を守り、発展させていくことの土台になっていること、また、現在は、ベトナム難民1世の声と若い世代の声の共存が目指されていることが明らかになった。
8. ライフストーリー研 究再考:在日ベトナ ム難民へのインタ ビューを振り返って (ポスター発表、招 待有)	単	2019年7月 21日	2019年度日本語教育学会九州沖縄支部活動	日本のベトナム人集住地域でフィールドワークを実施し、ベトナム 難民1世に生活と言語に関するインタビュー調査を実施してきた経験 を振り返った。インタビュー調査によって明らかにできるのは、第 二言語の使用や学習に対するベトナム難民による意味づけであると いう点を強調した。また、日本語教育に従事する者が、第二言語学 習者のライフストーリーを読むことで学習者への理解を深められる こと、さらに、自身の関わる学習者の声にも耳を傾けることの意義 について述べた。
9. 日本語教育における 質的研究の現状と課 題 (パネル、ディス カッサント、招待 有)	単	2019年7月 20日	2019年度日本語教育学会九州沖縄支部活動	日本語教育における質的研究に関連した5つの発表へのコメントを通して、質的研究の意義や可能性、方法について議論を行った。 発表者:石澤徹、岡田祥平、神吉宇一、小林浩明、嶋津百代、瀬尾悠紀子、牲川波都季、名嶋義直、林貴哉、古屋憲章、脇坂真彩子担当:これまで実施してきた複数言語を使用したインタビュー調査とライフストーリーの記述の経験をもとに、発表へのコメントを行った。
10.在日ベトナム難民は いかに日本語を学ん できたか:教室外の 日本語学習に注目し て(口頭発表)	単	2019年3月23日	日本語教育学会 2018年度第6回支部 集会	日本での定住生活の中で、話し言葉だけでなく読み書きも身につけたと述べる在日ベトナム難民の日本語学習を明らかにするためにケーススタディを実施した。積極的に日本語を学習していた理由には性格が言及されていた。個人的な要因の他にも、阪神・淡路大震災の際にボランティア活動に参加したことを契機に事務職員になったというエピソードからは、社会的な要因が大きく影響していることが明らかになった。
11. 日本語学習に意義を 見出せない理由:在 日ベトナム難民の ケース・スタディから (口頭発表)	単	2019年3月9日	言語文化教育研究 学会第5回年次大会	日本国内のベトナム人集住地域に暮らすベトナム難民の中でも、意 識的な日本語学習を行わずに日本で生活してきた人を対象とし、積 極的な日本語学習を行ってこなかった理由を探索した。調査者は日 本語を十分に学習した上でそれを活用していると想定していたが、 それぞれの調査協力者は言語に依存するとは限らない、個別の方法 で社会と関わりを持ち、生活上の課題を遂行していることが明らか になった。
12. ニューカマー特別枠 校の変容と課題:大 阪府の事例から(ロ 頭発表)	共	2018年9月3日	日本教育社会学会 第70回大会	大阪府立高校において全国に先駆けて施行された、外国人生徒を対象とした特別枠制度に注目し、特別枠校の学校文化の定着と変容、その課題について分析・考察を行った。特別枠校(7 校)の教員や、大阪府教育委員会や外国人支援協議会、外国人支援を行うNPOを対象としたインタビューを行い、外国人生徒に必要な支援を行う学

研究業績等に関する事項					
女事 単年込みがのりむ	単著・	発行又は	発行所、発表雑誌等		
著書、学術論文等の名称	共著書別		又は学会等の名称	概要	
2. 学会発表		1	I		
				校文化は、コンテクスト、システム、実践という3本柱から成り立っ	
				ていることを明らかにした。	
				発表者: 榎井縁,棚田洋平,林貴哉,王一瓊,石川朝子,今井貴代	
				子,比嘉康則,山本晃輔	
				担当:調査対象とした特別枠校7校のうち、1校(6校)におけるイン	
0 40=7				タビュー調査とその分析を担当。	
3. 総説					
 4. 芸術(建築模型等含む)	・フポー	 公野の業績			
4. 云侧(连来侯至守召0)	- AM	ノガガツ未順			
 5.報告発表・翻訳・編集・	└座談会・讃	L 討論・発表等			
1. Confucian	共	2024年3月	International	発表者:Takaya Hayashi, Gyo Miyabara	
Perspective on		12日	Symposium on		
Dying: A Study of			Transnational		
Vietnamese			Caregiving and		
Refugees Living in			End of Life from		
Japan (口頭発表)			Global		
(()			Perspectives		
2.団地を訪ねる:日系	単	2024年3月2	名古屋アジア散歩		
ブラジル人との出会	'	日	第3回シンポジウ		
いから(口頭発表)		[]	ム		
3. 継承語に関するナラ	単	2024年2月	シンポジウム「移		
ティブ研究の方法論	'	25日	動・境界・言語」		
的課題:在日ベトナ		2011	/共同利用・共同		
ム系移住者の事例か			研究課題「移民の		
ら(口頭発表)			継承語とエスニッ		
) (H8001X)			クアイデンティ		
			ティに関する社会		
			言語学的研究		
			(jrp000267)		
			2023年度第2回研究		
			会(通算第8回目)		
			/第33回東京移民		
			言語フォーラム		
4.愛知における在日べ	単	2023年10月	名古屋アジア散歩		
トナム人コミュニ	'	14日	第1回シンポジウ		
ティ(口頭発表)			المارة		
5.世代を越えて何が継	単	2023年2月	DDDLingフォーラム		
承されるのか:関西		18日	:継承語としての		
のベトナム人集住地		1.01	ベトナム語/第3回		
域の事例から(口頭			ベトナム語研究会		
発表)			1 / SHINI/LA		
6. Vietnamese	共	2022年12月	International	発表者: HAYASHI Takaya, MIYABARA Gyo, LI Kris Chung Tai	
Professional Care		12日	Symposium on	בבאק החווחסוור ומהמקמ, אווחשוותו טוס, בו הוווס טוועווק ומו	
Workers for			Transnational		
Vietnamese Living			Professional		
in Japan (口頭発			Caregiving for		
表)			Older Adults and		
14)			Care Workers'		
			Wellness in the		
			U. S., Mexico,		
			Taiwan, and		
			Japan		
7. 相互文化的交流をめ	単	2022年11月	第7回大阪大学豊中		
1.相互文化的交流をの ざした第二言語学習	于	4日	地区研究交流会		
支援のデザイン(ポ		* 11	地区训九次师云		
スター発表)					
8.日本語教室の活動内	単	2022年3月5	在日ベトナム人へ	 日本語支援シンポジウムの第二部では、日本語教室運営上の課題の	
8. 日本語教室の活動内容や教材(テキス	于	日	の日本語支援シン	ロ本語文抜シンホシリムの第二部では、日本語教室連貫上の課題の 一つとして、教室活動や教材について発表した。ベトナム語による	
ロー教内 リイク	1	I H	ツロ平町又1ダイノ	- ここして、鉄土伯助下鉄内について電水した。ハドナム語による	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
5.報告発表・翻訳・編集・	座談会・語	対論・発表等		
ト) について (講 演・ワークショッ プ)			ポジウム 2022、静 岡県ベトナム人協 会	解説のある教材を紹介し、それぞれの教材の特徴について述べた。 第三部ではZ00Mのブレークアウトルームにおいて、活動や教材に関 する疑問や課題について、参加者同士で意見を出し合い、事例を共 有できる場を作った。
9. 在日ベトナム人生活 者について(口頭発 表、基調講演)	共	2022年3月5日	在日ベトナム人へ の日本語支援シン ポジウム 2022、静 岡県ベトナム人協 会	静岡県ベトナム人協会の主催で在日ベトナム人への日本語支援ネットワーク会議が実施されており、2021年度の第5回目は一般公開のシンポジウムとして実施された。シンポジウムの第一部として、在日ベトナム人の人口構成や在留資格、居住地域の変化について述べ、ベトナム人への日本語教育を行っている参加者が各地域における在日ベトナム人生活者の状況や課題を知り、支援のネットワークを広げられるように話題提供を行った。発表者:野上恵美、林貴哉
10. ベトナム文化交流展 : 友好の絆を深めよ う(企画展パネル作 成)	共	2021年10月 2日~2021年 11月7日	姫路市見野の郷交 流館(見野総合セ ンター)1階企画展 示室	姫路市で開催された「ベトナム文化交流展」に際して、地域に在住するベトナム系住民が来日するに至った歴史的な背景と現在の暮らしや、ベトナムの文化に関して、地域住民に紹介するためのパネルの作成依頼を受けた。制作者:林貴哉、瀬戸徐映里奈担当:ベトナムの概要に関する「ベトナムってどんな国?」「ベトナム語の文字」「少数民族」、渡日の背景に関する「日本に暮らすベトナム人の人口」「在留資格のちがい」「難民として渡日したベトナム人」「近年のベトナム人の渡日背景」、兵庫・姫路のベトナム人に関連した「兵庫県内のベトナム人支援の取り組み:神戸市の場合」というパネルを作成した。
11.ベトナム人と長田の 今:携わる事業をふ まえて(口頭発表)	単	2021年9月 20日	第二回地域の多様性の歴史を学び理解を深めるセミナー、特定非営利活動法人神戸定住外国人支援センター	神戸市の外国人支援団体で活動したいと考える地域住民や学生ボランティアを対象としたセミナーで講師を務めた。日本とアメリカ合衆国のベトナム人集住地域で行ったフィールドワークに基づいて、ベトナム人コミュニティの様子を紹介した上で、支援を必要とする人にどのようにアプローチしてきたのかを述べた。最後に一人ひとりの状況に応じた支援を行うことの重要性を示した。
12. 多言語話者のライフ ストーリーを書く: 在日ベトナム系移住 者を対象とした複言 語的な調査の再考 (口頭発表)	単	2021年8月5日	第136回大阪大学地域研究フォーラム	これまでベトナム系移住者を対象に実施してきたインタビューでは、言語の混淆のあり様がその都度異なることを、応用言語学におけるマルチリンガリズム研究とエスノグラフィー研究における議論を参照しながら整理した。インタビューのトランスクリプトをもとに、背景の異なる二人の多言語話者が会話をすることで進められるインタビューがどのように構築されているのかを分析した。
13. 在日ベトナム人社会 における華人に関す る事例報告(口頭発 表)	共	2021年6月 26日	神戸華僑華人研究 会第190回例会	日本が受け入れたベトナム難民の中には、一定数の中国系ベトナム 人が含まれている。しかし、在日ベトナム人研究においては、ベトナム難民というカテゴリーが注目され、中国系としての側面は見落 とされがちであった。本発表では在日ベトナム人の定住の歴史を整理した上で、中国系ベトナム人の自伝的物語や新聞記事、フィールドで出会った中国系ベトナム人の語りの分析を行い、在日中国系ベトナム人の姿を描き出した。 発表者:林貴哉,瀬戸徐映里奈,野上恵美 担当:中国系ベトナム人の自伝的物語と新聞記事の分析。
14.世界の働き方(司 会)	共	2021年2月 11日	相互理解講座、ふ たば国際プラザ	外国にルーツを持つ子どもを指導する教員や外国人支援に関心を持つ人を対象とした相互理解講座として、神戸で働く3人(ベトナム、内モンゴル、スリランカ出身)をゲストに迎えて、出身地と日本での勤務経験を比較しながら話をしてもらった。 担当:ゲストに事前に聞き取りをし、当日は司会を担当した。
15.Social Support for Vietnamese living in Japan under COVID-19 (口頭発 表)	共	2020年11月12日	Mini-Symposium: Disaster, Trauma & Human services, Ritsumeikan University and University of Oklahoma	アメリカ合衆国と日本におけるコロナ禍のソーシャル・サービスに関するシンポジウムにおいて、日本における新型コロナウイルス感染症の状況、その中でのベトナム人コミュニティの課題、それに対するベトナム人支援組織「ベトナム夢KOBE」の取り組みを発表した。 発表者: Duong Ngoc Diep, 野上恵美, 林貴哉 担当: コロナ禍によって、自身がパーソナリティを務めるインターネット・ベトナム語ラジオ番組の制作・発信方法や内容がどのように変化し、コミュニティへどのような影響を与えているのかを述べ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・	座談会・記	L 対論・発表等		
16.外国にルーツを持つ 子どもへの学習支援 で気をつけるべきこ と(講演・ワーク	単	2020年10月 18日	学習支援者研修 会、特定非営利活 動法人神戸定住外 国人支援センター	た。 学習支援教室に通う子どもたちの背景を知るために、子どもや家族 の移動の事例を紹介した上で、各参加者にとっての学校経験と子ど もたちの経験の共通点と相違点を考えてもらうワークを行った。具 体的な支援方法の例として、学習支援で気をつけるポイントを紹介
ショップ) 17. オンライン対応実習 型日本語ボランティ	単	2020年9月6日~2020年	日本語ボランティア講座、ふたば国	し、外国にルーツを持つ子どもは、どのようなことにつまずくか、 なぜつまずくのかを考える機会とした。 これまでICTに親しんでこなかった日本語ボランティアを対象に、オ ンラインでの学習支援を行うことができるようになるための講座
ア講座:学習者の学 びと交流を深めるた めに (講演・ワーク ショップ)		10月25日	際プラザ	(全8回)を企画した。講座の前半では、Zoomの使用方法を理解してもらい、後半では実際に日本語学習者とオンラインでつなぎ、日本語での会話や学習支援をする実習を行った。最後にオンラインでの学習支援の困難点と必要な工夫を整理した。講座参加者は自分自身でZoomのホストになり、学習支援を行うことができるようになった。
18.世界の子育て:ベト ナムから日本に来て (司会)	共	2020年1月 18日	相互理解講座、ふ たば国際プラザ	外国にルーツを持つ子どもを指導する教員や外国人支援に関心を持つ人を対象とした相互理解講座として、日本で子育てをしているベトナム人女性2人をゲストに迎えて経験を聞いた。事前の聞き取りを踏まえて司会を行い、質疑応答のマネジメントを行った。
19. 日本語ボランティア の役割④: 学習者の生 活を取り入れた学習 活動 (講演・ワーク ショップ)	単	2019年8月31日	コミュニケーショ ン重視の日本語ボ ランティア基礎講 座、ふたば国際プ ラザ	「日本語を話せるようになりたい」という学習者の要望に応えるためには、その学習者が、どのような場所で誰とどのようなことを日本語で話したいと思っているのかを知り、その要望に合った支援を行う必要がある。そのような支援を行うための理論的背景として、学習者オートノミーやCEFRの行動中心アプローチを紹介した。また、ツールとしては、日本語ポートフォリオや自己表現活動を行うための教科書・リソースの紹介を行った。
20. 日本語ボランティア の役割①: 学習者の 話に耳を傾ける (講 演・ワークショッ プ)	単	2019年7月 28日	コミュニケーショ ン重視の日本語ボ ランティア基礎講 座、ふたば国際プ ラザ	日本語ボランティアを始めようとする人を対象に基礎講座を企画した。その中でも「学習者の話に耳を傾ける」では、日本語非母語話者を圧倒させずに会話相手になるための練習を行った。複数人で話をする場合、どの人がどのように会話の主導権を握り、どのように会話を継続しているのかを意識することで、発話量を調整できるようになる。普段は無意識に行っている自身の発話に注意を向けながら話す練習を行った。
21. 学習者の生活視点を取り入れた日本語学習支援を考えてみませんか (講演・ワークショップ)	単	2019年7月7日	KFC研修会、特定非 営利活動法人神戸 定住外国人支援セ ンター	地域で生活する成人日本語学習者の支援を行う日本語ボランティアを対象に、目の前の学習者を理解した上でその人に合った支援を行うための方法を探るためのワークショップを実施した。多様な背景を持つ学習者が、どのような生活場面でどのように日本語を使用しているのかを整理した上で、学習者の生活を知るために使用できるリソースを紹介した。
22.大阪大学文学部にお ける正課外言語学習 活動の取り組み:学 生主体によるタンデ ム学習プロジェクト (Tandem Learning Project) (口頭発 表)	共	2018年3月211日	第24回大学教育研究フォーラム	大阪大学文学研究科・文学部国際連携室国際交流センターで実施しているタンデム学習プロジェクトは、日本語教育を専門とする大学院生を、リサーチ・アシスタント(RA)として雇用して運営されている。言語教師とは異なる立場のRAが運営に携わることで、参加者が主体的にプロジェクトに参加でき、RAにとっては言語学習アドバイジングを実践する機会になっている。発表者:丁愛美、林貴哉、王静斎、劉姝、中尾未来、謝佩芳、李昡珠
23. "人"から考える言語学習:経験を聞くこと / 書くことを通して(口頭発表)	単	2017年11月3日	第4回阪大院生知 の横断、大阪大学	担当:RAの立場から、プロジェクト運営上の注意点や課題、運営に関わったことで得た学びについて述べた。 知の横断は、高校生を主な対象として、文理それぞれの研究について紹介し、討論する企画である。日本語教育に関する研究を始めた経緯と、自身の留学の経験、そして、現在、取り組んでいる質的研究の手法とその意義を述べることで、これから進路を決定しようとする高校生に対して情報提供するだけでなく、研究者に対しても、研究手法の違いによる発想の違いについて議論するきっかけを提供した。
24.在日ベトナム難民1世 の社会参加と複言語 使用(口頭発表)	単	2017年9月 23日	第65回多言語化現 象研究会	日本国内で移住を繰り返し、在日ベトナム人のための寺院の建設に も関わってきたベトナム難民1世の男性のライフストーリーを提示し た。ベトナム難民の多くは、短期間の日本語教育や生活指導を受け

	研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要		
5. 報告発表・翻訳・編集・	座談会・語	討論・発表等				
25.The role of church for "Home- making"(口頭発 表)	共	2017年5月5日	Bridging Strangers within : Reflections on Indigeneity, Diversity and Multiculturalism (Fourth Annual Joint Graduate Student Workshop), University of Toronto	た後、就職の斡旋を受け、日本での生活を開始した。彼の物語から、定住開始後の生活における、社会との関わり方の変化に応じて、複言語使用の実態がどのように変化していくのかを考察した。カナダの多文化主義に関するワークショップにおいて、国境を越えた移動と宗教実践を通した居場所(Home)作りについて発表を行った。カナダトロントに位置する2つの教会でのフィールドワークの結果を、日本における宗教実践や、多文化共生の取り組みと比較しながら分析し、カナダの多文化主義の現状と特徴を提示した。発表者:陳思源、神谷千織、林貴哉、佐々木美和担当:フィールドワークはすべての発表者が共同で行い、日本のカトリック教会との比較は林が行った。		
26. 大阪に暮らすベトナ ムルーツの子どもた ちへのベトナム語教 育 (口頭発表) 6. 研究費の取得状況	共	2015年3月 19日	ベトナムの文化を 知ろう!、八尾 市・大阪大学連携 協力講座	八尾市民を対象とした市民講座において、八尾市立小学校でベトナ ムルーツの児童を対象に実施されている母語 (ベトナム語) の授業 にサポーターとして参加しているメンバーで発表を行い、支援活動 での取り組みや課題を紹介した。 発表者:田之上真,近藤美佳,松繁遥香,林貴哉 担当:「在日ベトナム人の歴史的背景」について述べた。		
			学会及び社会にお	7 H. 17 V		
年月日				事項		